

ナウブリアからオリンピアへ

伊藤慶之助

ナウブリアは、町の広場のバスターミナル附近に、みやげもの店や、レストラン、酒場などが多くさんならんでいて町の中心をなし、汽車の駅もこの附近にある。

ナウブリアの港は、ミケネ時代から、よく知られた古代ギリシャの港だが、今も、十数隻の船が泊っていて、船員の姿や数軒の酒場もみえるが、何となく活気のない港である。

十七、八世紀頃に、トルコ人とヴェネチヤ人の戦争で、トルコ人の有に帰したが、一八二二年に、現代ギリシャの独立戦争の時、ギリシャ人のナウブリア襲撃となって、一時独立軍の首都となった事もある。

今は、古代ギリシャ時代の、これという遺跡も残っていないが、ミケネ、ティリンスを見る足がかりの地として、ギリシャにはめづらしい静かで清潔な町である。一八八四年に、シュリーマンがティリンスを発掘する時も、ナウブリアの宿から、毎日馬でティリンスに通ったとある。

私の泊ったホテル、クセニアは、アルゴス湾をみおろす丘の上にあつて、すぐ左側に海にかぶさるように、高く聳立したパラミディ（二二五米）の岩山がある。

草木の一本もない、そそり立った岩塊をぬって、城壁と道が頂上まで続いている。昔、ヴェネチヤ、ビザンツ、トルコの要塞があつたが、近年になって牢獄に使用され、今は町の観光施設として利用されている。

頂上に上ると、ナウブリアの町、アクロポリス、アルゴス、ティリンスの丘、ペロポネソスの山々、ミケネの方面まで眺望できると聞いたが、九百に近い石段のジグザク路を登らなければならないといふので、心臓に自信のない私は、登らなかつた。

ナウブリアから、アルゴスを迎て、ミケネへ坦々たる道が通っているが、ナウブリアを出て一里ほどゆくと、平凡な田園風景のオレンジ畑の

奥に、石垣でかこまれた長さ三〇〇米程の低い陵が見えた。自動車の運転手に、テイリンスではないのかと聞くと、そうだという。ホメロスの詩で知られた、古代テイリンスの王宮の跡も、いまは見落して通り過ぎる程の、平凡な田園風景のなかにねむっている。

自動車をおりて近づくと、さすが巨石をつみあげた古代の遺跡が、姿を見せる。テイリンスは、ハラクレスの誕生の地だと伝えられるが、附近にはあまり民家もなく、オレンジなどの畑が続いている。

テイリンスは、シュリーマンが一八八四年に、ミケネの発掘よりは八年ほどおくらせて発掘し、デルプフェルト博士の協力によって、ミケネの獅子門に相当する巨石を使った正門や、前に広い庭をもつメガロン、浴室の大きい台石などの遺跡が発掘されているが、王の墳墓が出てこなかったため、ミケネのように、黄金のマスクや、金、銀、宝石の服飾品などの出上がなく、ミケネほど、世間の注目を引かなかった。

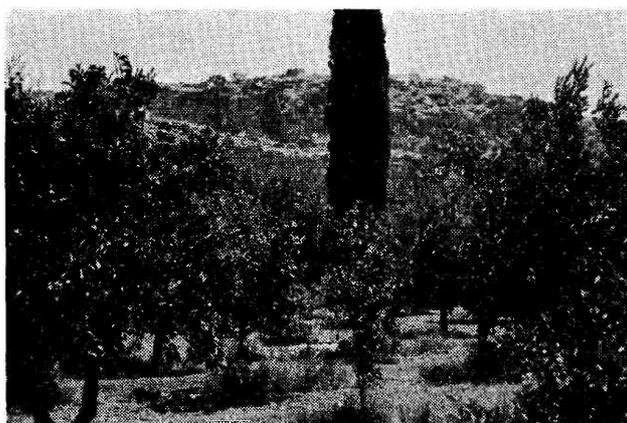
テイリンスから、果実畑や、ビザンツの小さな寺のある村を過ぎると、アルゴスの町に入る。町に入るとすぐ、家の背後の山の頂上に、突如と中世の古い城塞の城壁が目に入る。そしてその山の中腹に、それとは対照的に、ハギア、マリナ僧院の白い清楚な姿が、風情を添えている。

この附近の山舎の路の四つ角に、日本の辻地蔵のように、マリアを祭った小さなほこらが立っているのは、非常に印象的である。

アルゴスからテイリンスを辺て、ナウブリアに出る街道は、古代ミケネの時代から重要な道で、今も、ろばに引かせた二輪車や自動車、馬車の往来がはげしく、たまには数頭の羊をつれた、女の姿も見ることがある。

ミケネの遺跡は、心はずんで、朝八時にタクシーでホテルを出たので、遺跡に着いた時には早すぎてまだ鉄門が閉っていて、なかに入れなかった。

ナウブリアからオリンピアへ



第1図 テイリンスの遺跡

ナウブリアからオリンピアへ

遺跡の附近には、一軒の民家もなく、物売る店もなく、管理人も一里程手前の村から上ってくる。

前の広場には、アメリカ人や、フランス人の観光バスも、門のあくのを待っていた。

この広場の東北と、アルゴス平野に向ったなだらかな丘に、古代人の住居址が掘りだされているが、地形や山の雰囲気から、中国の大同などと似た、古代の王城の地という思いが胸にわいてくる。

やがて管理人が来て、入場料を払おうとしたら「お前はガイドだから、金はいらない」といって受取らない。仕方なくそのまま入ったが、フランス人としばらく話していたのを聞いて、感ちがいらしい。

門を入れて少し上ると、獅子門がある。この門は、内側から見ると案外つまらないが、外側から見ると、左右両袖の大きい石の石積みが目立つ。門の鴨居に中高に反った一枚の巨石を渡し、その上に三角形に二疋の獅子が細い柱を挟んで立ち上っているレリーフがはめ込まれている。

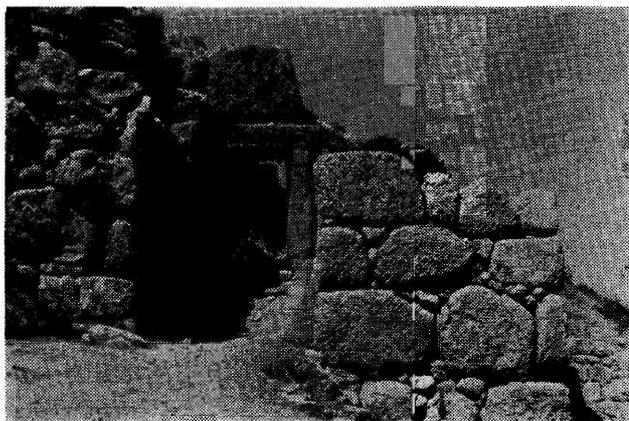
レリーフの獅子の形は、ヌラリとした海豚のような線描に見えるが、これがなかなか、アルカイック風な、強い美しいフォルムで彫られていて、非常に優れたものである。伝説によれば、ティリンスの城壁の石壁を造った、サイクロプスの作だと云はれる。

獅子の門を入ると、五個の王の墳墓がおさめられた、大きい円形の石壁が、穴のようになって下に見おろされる。

一八七六年と七年に、ハインリッヒ、シュリーマンが、この墳墓を発掘して、数個の古代人の遺骸と、その周囲にあった黄金の面や金、銀、宝石の腕環、留針、胸飾り、象牙などの装飾品、冠、黄金の二本の長い角のある銀製の、牝牛の頭などの出土によって、ホメロスの「イリアット」に歌はれている「トロイの伝説」と符合することを知り、紀元前一三〇〇年頃の文明であることを発表して、世界をおどろかせた。

アテネの、国立博物館の、ミケネの室に陳列されている、古代の人達の、これらの美術品を思い浮かべて、シュリーマンの書いた記録を、読みかえしてみよう。

第2図 ミケネ遺跡裏門



「その墳墓の基礎は、瓦礫の層でおおわれていて、その上に相互に、等間隔で、五個の人間の骸骨が、三体は頭を東に、足を西方に向け、他の二体は頭を北に、足を南方に向けて、横たわっていた。

明らかに、その死体は、彼らのめいめいが、横たわっていたその場所で、火葬に附されたのである。

この第四の墳墓の五体は、寶石で飾り立てられていて、遺骸には全部明瞭な火災の跡が残っている。第三の墳墓でもこの墳墓でも、火葬後に黄金の装飾品とともに、一〇センチの厚さの、白い壁上の層でおおわれ、その上に瓦礫の層が重ねてある。

頭を北に向けていた二個の死体は、打出し細工の立派な黄金の面でおおっていた。

残念なことに、その一つは、火葬と瓦礫の重さのために、ひどく傷ついており、その上に灰がこびりついているので、よい写真をとることができなかった。

高い額、長いギリシャ風の鼻、唇の薄い小さな口を持った若い顔立で、両眼は閉じ、睫毛や眉の毛が巧みに示されている。

第二の仮面は、ふっくらした頬と小さな額、口は小さく、唇は厚く、眉毛は上品に示され、両眼は閉じている。

第三の仮面は、頭を東に向けた骸骨の顔をおおっていたが、他の面と全く異った人相を示している。

薄い唇の上部左右のしわは、老齢の相をあらわし、眼も非常に大きく、両眼は開き、睫毛も眉もない。

この三つの黄金の仮面にあらわれた容貌は、互いに非常に異っており、神や英雄の理想的な肖像とも異っているから、おのおの仮面でおおわれていた、その死人の像をあらわすものに違いない」

「黄金のボタンのついた銅製容器のすぐそばに、私（シュリーマン）は二本の長い黄金の角のある銀製の牝牛の頭を発見した。それは額に美しく装飾された黄金の太陽がついていた。

頭の中央には丸い孔があるが、これは花を差し入れるのに用いられたのであろう。ミケネの金細工人は銀に鍍金する術を知らなかった。それをしなければならぬ時には、いつでも、彼は銀に銅を被せ、次いでその銅に金を被せたからである。

このすばらしい銀製の牝牛の頭も、そのようにして製作したので、頭はよく鍍金が保持されているが、目や耳のところではほとんどはげているので、それがよく解明される。

この牝牛の頭は、ミケネの守護神である、女神ヘラーをあらわすものだろう」(ホメロスなくしてトロヤなし) W・シュミット編・桃井直達訳より

発掘した時の、シュリーマンの喜びと興奮が、目の前にみえるようで、面白い。

ミケネの遺跡は、アテネのアクロポリスや、デルフィの遺跡と違って、地上の建築物が全て無くなって、わずかに獅子門と、丘の中腹にあるアガムノンの墓と称される宝庫だけで、どちらをみても、土と石壁の残塁ばかりで、私達でさえ、暑さが身にこたえる。

王の円形墳墓も、黄金の仮面をつけた五個の死体や、宝石の腕環、銀の牝牛の頭、などを頭に浮かべてみると、唯の土と石の瓦礫に見えて、あじきないものである。

朝逢ったフランス人の若い学生も、暑さにうだった顔をして「古い石ころばかり見せられ、老年のしわくちゃばあさんの、お尻を見ているようで、参った……」とつぶやいていた。

しかし、太陽が落ちて、人の姿も見えなくなった王宮の遺跡の石段を歩いていると、そばに誰れだか、人の足音が耳の底に聞こえるような、妙な、不思議な静寂な心になってくる。

私はナウブリアからオリンピアへ出るのに、かねてペロポネソスの山岳地帯である、アルカディアの中部盆地を通りたいと思っていた。

この地方は、古代の国家マンティネアのあったところで、紀元前四一九年にアテネのアルキビアスが、スパルタに攻撃をしかけ、この附近で、アテネ、アルゴス、マンティネアの同盟軍が完敗した古戦場である。

現在のトリポリスの町が、アルカディアの中心地であるが、二千米に近い山々にかこまれた高地で、樹木はなく、水のない岩山と、赤灰色の峰々が、どこまでも続いていて、畑など、まるで見られない乾燥した、荒涼たる風景である。

私は汽車や乗合自動車をさけて、ハイヤーで行くことにして、ホテルで屈強な運転手を二人雇って、朝八時前ホテル、クセニアを出発した。



第3図 ミケネ王宮の石段

乾燥した荒涼とした峰々をぬって、自動車はひたすら登って行って、アルカディアの中部盆地に出て、トリポリスの町に入ったが、大きい町ではあるが、何となくほこりっぽい雰囲気のある町である。

この辺りは古代のマンティネイアで、アルゴスから上ってくると、さすがに山国だという感じがする。

レストランで食事をして、テゲアのことを聞いた。ここから南へ一里程のところに、古代アルカディアの中心都市として栄えた、テゲアの町があり、彫刻家スコパスの建築したアレア、アテナ神殿のあったところだが、レストランの主人の話によると、今はみるかげもない、あわれな寒村になって、神殿の遺跡も田舎家の裏に埋って、どうなっているのか見ることができないと云っていた。

トリポリスから道をとって、しばらく走るとメガロポリスに着く。この辺りはトリポリスの中部盆地の西に続いた小さな盆地である。それから、アンドリツチナに出て、いったん引返して、トリポリスからピルゴスに通じる大きい道路に入った。

二人の若い運転手は、時々交代しながら、走っているのだが、荒涼たる岩山ばかりで、自動車のなかにいても、頭のなかまで焼けつくような暑さである。

私は地図と首っぴきで、写真を写したり、おりにスケッチをしたりしたが、暑さが頭のずいまでしみ込んできて、癡呆症のような状態になって、もうひたすら早くオリンピアへ着くことを願った。

浜田青陵先生の、昔の「希臘紀行」を見ると、このペロポネソスの山岳地帯、トリポリス、メガロポリス、アンドリツチナ辺りを、馬の背にのって幾日も幾日もかかって、馬から落ちて腰を痛めたり、毎夜南京虫になやまされながら、歩かれた事を思うと、自動車に乗って、もんくをいっているといけないと思う。

それでも、夕暮七時半頃になって、ようやくオリンピアの村に入った。

オリンピアは、赤松の老樹や、ギリシャの特異な形をした大きい糸杉などにおおわれた緑陰の村で路には赤と白の杏竹桃が咲き乱れて、まことに美しい。

ナウブリアからオリンピアへ



第4図 オリンピア遺跡への並木

終日、乾燥した荒涼たる岩山と、焼けつくような太陽の暑さにあえいできた私は、山には樹木が繁り、アルフェイオスの河畔には、深かい水の流れがあり、畑にはオリブや、ぶどうやオレンジが、たわわになっている。

頭も心も洗われて、すがすがしい快よい気持になった。

ホテル、スパは、古くから知られた格式のあるホテルで、丘の深かい樹林にかこまれ、従業員も素朴で親切だが、客室についたバスや冷房が古くて、アテネやナウブリアのホテルのように快適でない。

私は風呂に入ると、よけいに身体のタガがゆるんで、夕食もろくに食べずに、朝まで、前後不覚に寝てしまった。

朝五時前に目がさめると、よろい戸のあいだから、すがすがしい太陽の光りが、さしこんでいる。窓を開けると、樹の葉をぬって、さわやかな朝の空気が、室いっぱい流れこんできた。昨日の疲れも忘れて、カンバスを出して絵を描きはじめた。

赤松の老樹の幹の透間から、遠くオリンピアの遺跡が、朝の陽をうけて、明るく光って眺められる。

東には、アルフェイオス河の流れをこえて、クロノスの暗い山影の向うに、朝やけの明るい空が、くっきり山を浮かせてかがやいている。

ふと気がつくとき、腹の調子がどうもおかしい。きのうの暑さ当りで、腹を痛めたらしい。朝食には、生のレモンをしぼった汁と、オートミルを少し食べた。

現在のオリンピアは、道路の両側に、家が四丁ほど並んでいるだけの寒村で、ホテルも近代設備をもつものは、私の泊っているホテル、スパと、新しい大きいのもう一軒あるくらいで、観光客をのせた観光バスも、遺跡の見物が終ると、引揚げてゆき、夕暮からは人通りも少なく淋しい田舎の村にかえってしまう。

私のようにホテルで滞在する客はほとんどいない。夕暮からは、毎夜のように、道路をおりて、谷の上に建つレストランに腰かけて、ぼんやり時間をつぶす。

村の若い衆も娘も、一軒のこのレストランに集ってきて、踊ったり、ふざけたりしているので、私達はすぐ顔なじみになった。

古代ギリシャでは、神々をたたえる行事として、各都市で運動競技が盛んに開かれたが、一般に知られているのは、オリンピアのオリンピニ

ク競技会、デルフィのピテア競技会、アルゴスのネメア競技会、コリントのイストミア競技会の四つの大競技会であるが、その内でも、ギリシャ全土の人達の血をわかせたのは、四年に一度開かれる、オリンピックのオリムピック競技会であった。

競技に出る選手の資格は、プロでなくて、アマチュアとして個人で勝敗を競うことになっていた。

そして競技の優勝者とともに、その出身地の都市をも表彰されることになっていたので、ギリシャ全土から優秀な選手がオリンピックに集まりそれにともなつて、その都市の指導者、若い文学者、政治家、芸術家が多く集つてきた。

古代のオリンピックも、今とかわらぬ淋しい寒村で、それらのおびただしい人達を宿泊させる家がなく、遺跡の横を流れるアルフェイオス河畔、遺跡の東北にあるクロノスの丘に続く広い草原に、テントを張つて野営した。

空地には、物売りの店、見世物小屋、占師、インチキ賭博なども店を張つて、大変なさわぎであった。

野営場では、夜は政治の話がはずみ、文学、芸術が論ぜられ、選挙の取引から、都市の有力者間で利害のかけひきなど、全ギリシャの社交に利用された。

このテント村で、都市国家の有力者の間に、平和条約が成立されたことも、しばしばあったと伝えられる。

又、オリンピックのオリムピック競技会の開かれている期間は、全ギリシャ都市国家間の盟約によって、全ての戦争は休止されることになっていた。

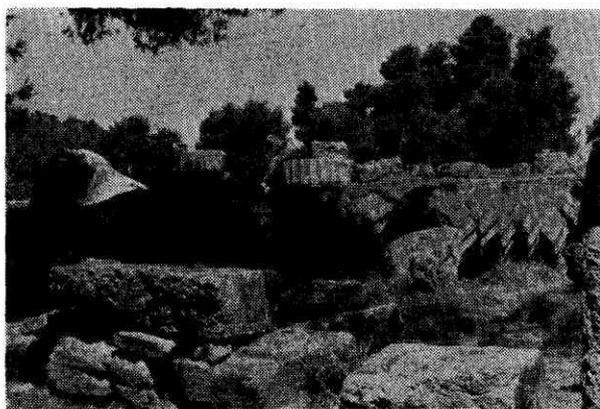
ペロポネソス戦争の時、スパルタがこの盟約を無視したために、後にその盟約によって、多額の罰金を課せられたと伝えられている。

今も、これらの河畔や、クロノスの広い草原には、家も建てられず、人のけはいもせず、雑草のあいだに、アネモネの花や、名も知れぬ可憐な紫色の花が、咲きみだれていて、千年の星霜を知らないかのようなのである。

遺跡の復原図を見ると、ゼウスの神殿を中心に、クロノスの丘に近く、ヘラの神殿があり、その少し背後にシキオン、シラクサ、ビザンティオン、シバリスなど十二の宝庫が並んでみえる。ゼウスの神殿をかこむように、長い柱廊があちこちに見える。

ゼウスの神殿の周囲には、競技の優勝者を記念する大理石の彫像が、ところせまいまでに林立している。

ナウブリアからオリンピックへ



第5図 ゼウス神殿跡

ゼウスの神殿は直径二米に近い、貝の化石をふくむ石灰石の柱をもつ、ドリア式の建築で、内陣には、フィディアス作、月柱樹の冠をつけたゼウスの神像が安置されていた。

紀元六世紀の大地震で破壊され、今は一本の柱も立たず、たおれた柱が風化して、海綿のように木目荒く、黒くなって、ごろごろ積み重っているのは、凄愴な感じである。

屋根の破風は、西側が「ケンタウロスと戦うラピタイ人」東側が「ヒッポダミアの侍女」両方も、オリンピア美術館の大きい室に移され、破風にはめ込まれていた古代の時の順に、長い三角形の群像にして、向い合って陳列されている。

平凡な作品ではないのだが、ことに東方破風「ヒッポダミアの侍女」の人物と人物の、線のつながりに緊密なムーブマンが見られず、何となくよそよそしい固さがある。

西方破風「ケンタウロスと戦うラピタイ人」には、その構成上の欠点はみられないが、戦うケンタウロスの頭部、ラピタイ人の頭部共に男の顔の表情に、常套的な手法が目について、はなはだ気になる。

中心に立つアポロンの顔も、ケンタウロスや、ラピタイ人ほどではないが、常套的な、ものが目について気に掛る。特に優れたものとは思えない。

となりの奥の室には、プラキシテレスの「ヘルメス」が陳列されている。

大きい室のまんなかに、一つ置かれていて、四方から觀賞できるようにになっているが、正面から向って、右寄りから、力をぬいた左足が前方に出てくる位置からみると、腰のひねりと、かたむけた首の様子などが、デリケートな美しさを見せ、小児のからだの方向、布のひだの線などと照合して、まことに美しい。

プラキシテレスの唯一の原作といわれるが、大理石の肌色も、滋味があって明るくかがやいてみえる。すばらしい作品である。

この彫刻は、一八七七年にオリンピアのヘラの神殿の瓦礫の下から、粘土に包まれたまま、完全な形で発見されたといわれているが、これは

ヘラの神殿に安置された神像でなく、ヘラの神殿かゼウスの神殿に奉納された彫刻であろう。

美術館の中央の室の、ペオニオスの勝利神（ニケ）は、顔の前面がひどく欠損していて残念だが、胸から足にかけての肉づけは、まことに美しい。

紀元前五世紀の作だが、後方に波のように動いている布の流れも美しい。

これを、ルーブル美術館にあるサモトラケの勝利神（ニケ）と比較して考えると非常に面白い。

サモトラケの勝利神は、構成が非常に複雑で、衣装のひだが重要な役目をなし、肩に大きい翼をもつ神の姿をしている。

オリンピアのペオニオスの勝利神も、古代、造られた時には、肩に翼をもち、片手で大きい布をさしあげている姿になっているが、両翼と、ささげているうでの上半と布の大部分が欠損して無くなっており、かえって今見る若々しい豊満な肉体の現実的な女性として、サモトラケの「ニケ」とは全然違った魅力になっている。

オリンピック競技のスタディオンは、聖地の東端から、丸い穹窿門の地下道をくぐって、出たところにある。

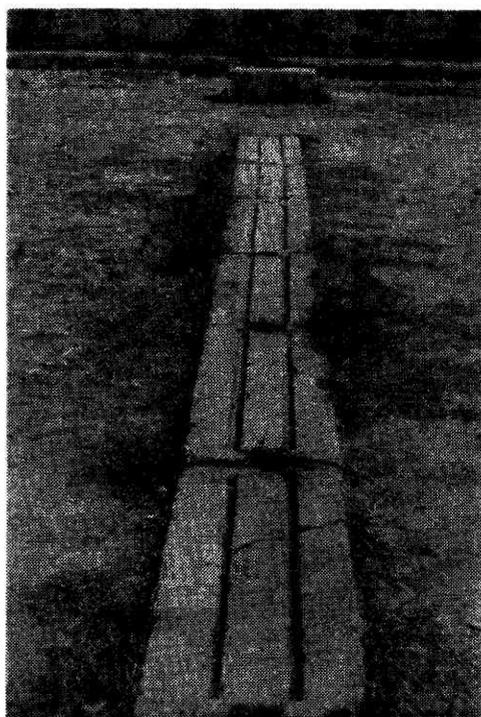
細長い走路の三方が、小高い芝草の斜面にかこまれて、この斜面が見物席である。

手前に、古代のスタートラインの敷石が発掘されており、切りこまれた溝に足を置いて、一、二米間隔で、二〇人が同時にスタートできる長さになっている。端れに、スタートをあいづする人の四角の石の台がある。

オリンピック競技の花形は、この徒競争と、四頭の馬に引かせた戦車競争であった。

四〇台もの戦車が、同時に出発し、一四キロの距離を猛烈に争うので、四頭

ナウブリアからオリンピアへ



第6図 オリンピックのスタートライン

の馬がかち合ったり、石柱を廻る時に横すべりしたり、転覆したり、砂塵うず巻く凄愴な光景であった。

ゼウス神殿前の空地では、ボクシングとレスリングの競技がおこなわれた。

ほとんどの競技の選手は、裸体で勝負を争ったが、戦車競争の騎手だけは衣服をつけた。これは勝利の栄冠が騎手にあたえられずに、戦車と馬の所有者にあたえられた。

ギリシャの彫刻は、解剖学的にも生理学的にも、驚くほどの正確さをもって人体を造りあげている。

しかしギリシャでは、死者への尊敬が非常に深かったので、医者でさえ人体解剖を禁じられていたので、ルネッサンス時代と違って、死体による解剖研究はやっておられない。

しかし、神をたたえる行事として、運動競技がギリシャ全土の都市でたえず開かれ、全ての選手が裸体で競技を争ったので、彫刻家、画家に

動く形の適確な研究のべんぎをあたえた。

それと、ギリシャの多くの都市で催される競技会の優勝者の名誉を記念する、彫刻像を造る習慣とは、ギリシャ美術に大きい影響をあたえた。

オリンピアのオリンピック競技会は、ほんらいは、神をたたえる宗教的な祭典であったが、古代ギリシャの商人も、ぬけめなくこれを利用して、四年に一度の大げさな馬の市や、衣類の市も開かれた。

今は、全く人影もないこれらの遺跡を歩いていると、足許の雑草のなかから、突然、大きい鳥が飛び立ったりしておどろかされる。

私はオリンピアに着いて二日目に、疲れてヘラの神殿の遺跡の石に腰かけていて、つまれた柱の瓦礫の下から、ふと、アカンサスの葉の五輪を彫った石をみつけて、事務所に届けた。今のオリンピックのマークである。

私は、ギリシャのどの都市の競技会でも、優勝者の頭にのせられる栄冠は、野生の月桂樹の冠だと



第7図 オリンピアの柱廊

考えていたが、ギリシャの四大競技会では、オリンピアのオリンピックク競技会では、野生のオリーブの葉の冠、コリントのイストミア競技会では松の冠、デルフィのピティア競技会では、月桂樹の冠、アルゴスのネメア競技会ではパセリの冠が、それぞれ優勝者の頭上にあたえられたということがある。

(写真は筆者撮影)

ナウブリアからオリンピアへ